



教育学部

准教授 **國枝 春恵**さん (音楽・作曲家)

(国枝 春恵)

Kunieda Harue

●プロフィール

- 1983年 東京芸術大学大学院作曲専攻修了
- 1986年 タングルウッド夏期講習給費研修生
- 1996年 熊本大学赴任
- 1998年 熊本大学教育学部准教授
- 2003年 文化庁特別派遣在外研修員

吉田茂首相の国葬でピアノを弾く

声楽家の父とその弟子である母。音楽的環境の中で生まれ育った国枝さん。日曜日には、讃美歌を歌いながら教会への坂道を家族全員で歩きました。3歳半から父の手ほどきを受け、4歳で桐朋学園子どもための音楽教室に入室しピアノとソルフェージュを習い始めます。ピアノは有賀和子氏に師事し、順調に才能を伸ばし、数々のオーディション、公開演奏会にも出演するようになります。9歳の時には吉田茂首相国葬のTV特別番組でモーツァルトのピアノソナタを弾きました。

音楽教室では最優秀のクラスの生徒に、夏休みの作曲の課題が出されました。とにかく国枝さんはこの課題が楽しみで楽しみでしかたなかったといいます。小さい頃から絵を描くことが好きで小学校では美術クラブに入り絵画コンクールで入賞も。自分の感覚を存分にはばたかせることの楽しさに取りつかれていました。小学校の卒業アルバムに「将来は作曲家になりたい」と書いていたそうです。

演奏から作曲の道へ

周囲の期待の中で桐朋女子中学に進んでからもピアノひとすじでしたが、音楽界の派閥争いを経験すると同時に、瞬間芸術の怖さを知るようになります。そしてショパンやドビュッシーとの出会いを通して、ますます作曲に傾倒していきます。都立芸術高校ピアノ科に入学した国枝さんは、日本にフランスの音楽教育を本格的に導入した、作曲界の大御所である池内友次郎氏からプライベートに作曲を習い始めます。

その後、東京芸術大学作曲科から同大学院音楽研究科作曲専攻へと進み、1983年に修了。学生時代は体力的にも精神的にもキツかったとおっしゃいますが、一方で前衛音楽からジャズに至るまで様々な音楽との出会いの時代でもありました。大学4年時から作品発表を始め、コンクール入選も果たしますが、合唱曲では国枝さんの言葉に対する感受性の豊かさが発揮されます。1986年に現代音楽祭等も有名なダングルウッド夏期講習給費研修生として過ごした2ヶ月間が国枝さんの転機になったそうです。

研修生仲間から「なぜこのように書いたのか。何かシステムはあるのか」という質問に十分に答えられない自分。国枝さんは作曲をする自分を見つめ直し、問い直します。そうした結果、ロジカルな音列技法と自分の感覚を結びつける手法を手に入れます。

〈地上の平和〉が世界初演

1996年、国枝さんは熊本大学に赴任します。現在は後進の指導ばかりでなく、地元での音楽活動にも力を入れています。2003年に倒れ、翌年亡くなった父親の闘病中に作曲した曲が《レヴェレーション》(2004) ヨハネの黙示録の中の数字による構成というのですが、「父に聴いてもらうことはできませんでした」。この曲は、今年、熊本県立美術館本館で初演された朗読劇「光の道を～ガラシャ殉教」の音楽にも使われました。2005年にはN響 Music Tomorrow 委嘱作品《地上の平和》が世界初演されました。

作曲家であり演奏家であるという二者間を行きつ戻りつしながら進化を遂げている国枝さん。「人を驚かすのが好き」という。「現代音楽は、演奏や解釈が難しいと、今は言われてもいい。50年後あるいは100年後に、面白くてすごくいい曲だと、多くの人に演奏してもらえそうな曲を作りたい」と言って瞳を輝かせました。



高千穂にて

100年後の人々を驚かせ喜ばせる作曲を。